

くりはざま
栗狭間遺跡

所在地	豊田市下山田代町栗狭間地内 (北緯35度02分28秒 東経137度32分52秒)
調査理由	豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業
調査期間	平成26年5月～平成27年2月
調査面積	10,050㎡
担当者	武部真木・町田義哉・鈴木恵介



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

- 調査の経過** 調査は愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成26年5月から平成27年2月にかけて実施した。調査対象地の現況は旧耕作地と植林された山林であり、地形に応じて14A区・14B区・14C区に分けて調査を行った。今年度の調査面積は合計で10,050㎡である。
- 立地と環境** 栗狭間遺跡は郡界川の支流の一つである沖川の東岸丘陵部に位置する。遺跡は、周囲を緩斜面に囲まれた盆地状の地形であり北側に谷が開口している。谷を挟んで東に鶴ヶ池遺跡、北側の尾根上から谷にかけてに丸山遺跡と孫田遺跡が存在しており、縄文時代の遺物散布地と平安時代の遺跡群が展開している。
- 調査の概要** 遺跡は、北向きの緩斜面(14A区)と東向きに開口する東西方向の谷と周囲の緩斜面(14B区)、南側には東西方向の小谷に隔てられた尾根先端の西向き緩斜面(14C区)に分かれる。14A・B区間の盆地状の平坦地は南北方向に伸び、広いところで幅70m、狭隘部で幅20m程である。調査地点の標高は460～471mを測る。
- 調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構や遺物が確認されており、特に平安時代について良好な資料が得られた。平安時代の遺構は地表面直下の黄褐色土層上面にて検出され、同時に黄褐色土層は縄文時代晩期の包含層でもあった。
- 縄文時代** 14A区では上述の黄褐色土層から縄文時代晩期の条痕文土器が多く出土したが、縄文時代を通じて、陥穴以外に明確な遺構は確認し得ていない。14B・C区においては、同様の黄褐色土層から条痕文土器・石器の出土はあるものの、14A区に比較すれば出土量は少ない。現在埋没している小規模な谷地形には黒色土が堆積し、14A区では層中からわずか1点ながら押型文土器の破片が確認されている。黒色土除去後の地山面では陥穴を計11基確認した。なお14B区斜面部の地山面には凝集した広域火山灰を数点確認しているが、黒色土中には確認できていない。黒色土は火山灰の堆積後に新たに堆積した可能性を考えたい。
- 平安時代** 14A・B区では、平安時代後期(K-90～O-53号窯式期)の灰釉陶器椀、土師質甕を伴う竪穴状遺構が計8棟確認された。多くが板状の花崗岩を側壁として利用するカマドを傾斜の上位側に配置していることから方位は一定ではない。竪穴状遺構の残存状態は、斜面上位に位置するカマド側が残り、傾斜の下位に位置する反対側が欠損することが多い。竪穴内のカマド右側の竪穴側壁に接する位置に土坑が掘削される場合が多く、遺物の多くはこの土坑か、カマド周辺に散乱している状況での検出である。竪穴状遺構(O60SI)では土師質甕がカマド右側に正位に据えられた状態で検出されている。210SIは一部が欠損するものの床面の残存状況は良く、北辺と東辺それぞれにカマドが配置されている点で特徴的である。このうち東辺のカマド240SLは南側の側壁をなす花崗岩が抜きとられているため、同時に

機能していたとは考えられない。床面は貼床が施されるものの、上記2基のカマド跡との対応状況は明確ではなく、床面を再構築した手がかりは見られない。

他には、竪穴状遺構に近接、あるいは竪穴状遺構内に構築される炉跡がある。前者の例では090SIと111SL、235SIと077・083SL、後者は140SIと190SLである。いずれも炉跡周辺で鍛冶滓が出土するため、炉は鍛冶を目的として構築され、竪穴状遺構はこれに関連する可能性がある。特に235SIは、近隣の炉077SL・083SLとの距離が約6mと離れているにも関わらず、竪穴状遺構の上層から下層にいたるまで鍛冶滓が含まれることから、併存していたと考えたい。後述する200SB内にも169SLが属するが前後関係は不明確である。

中世では、掘立柱建物跡200SBがある。14B区の谷部上位斜面を切り出す形で平坦面が造成され、確認できるのは3間×2間の1棟だが、周辺にはさらに多数の柱坑があることから立て替えや柵の設置が行われた可能性がある。造成された平坦面の埋土からは尾張・瀬戸編年7～8形式の陶器(山茶碗)が出土し、200SBの柱坑からは灰釉陶器破片が確認された。

まとめ 今回の調査では、平安時代後半・鎌倉時代末の2時期の遺構・遺物が確認され、縄文時代の遺物が出土した。特に平安時代後半の遺構面と縄文時代晩期(馬見塚式期)の遺物包含層を明確に確認できた。また竪穴状遺構には鍛冶炉や鍛冶滓との関連をうかがわせるものがあり、竪穴状遺構の用途を考慮するための重要な資料となり得る。

竪穴状遺構群とは時期・立地を異にする掘立柱建物は、古代と中世では山間地の利用方法が異なる、あるいは環境が変化していることを示唆しているものと考えられる。

(鈴木恵介)



栗狭間遺跡 調査区遠景 (南から)



14B区210SI(南から)



14B区215SL(南から)



14B区出土墨書灰釉陶器「本」

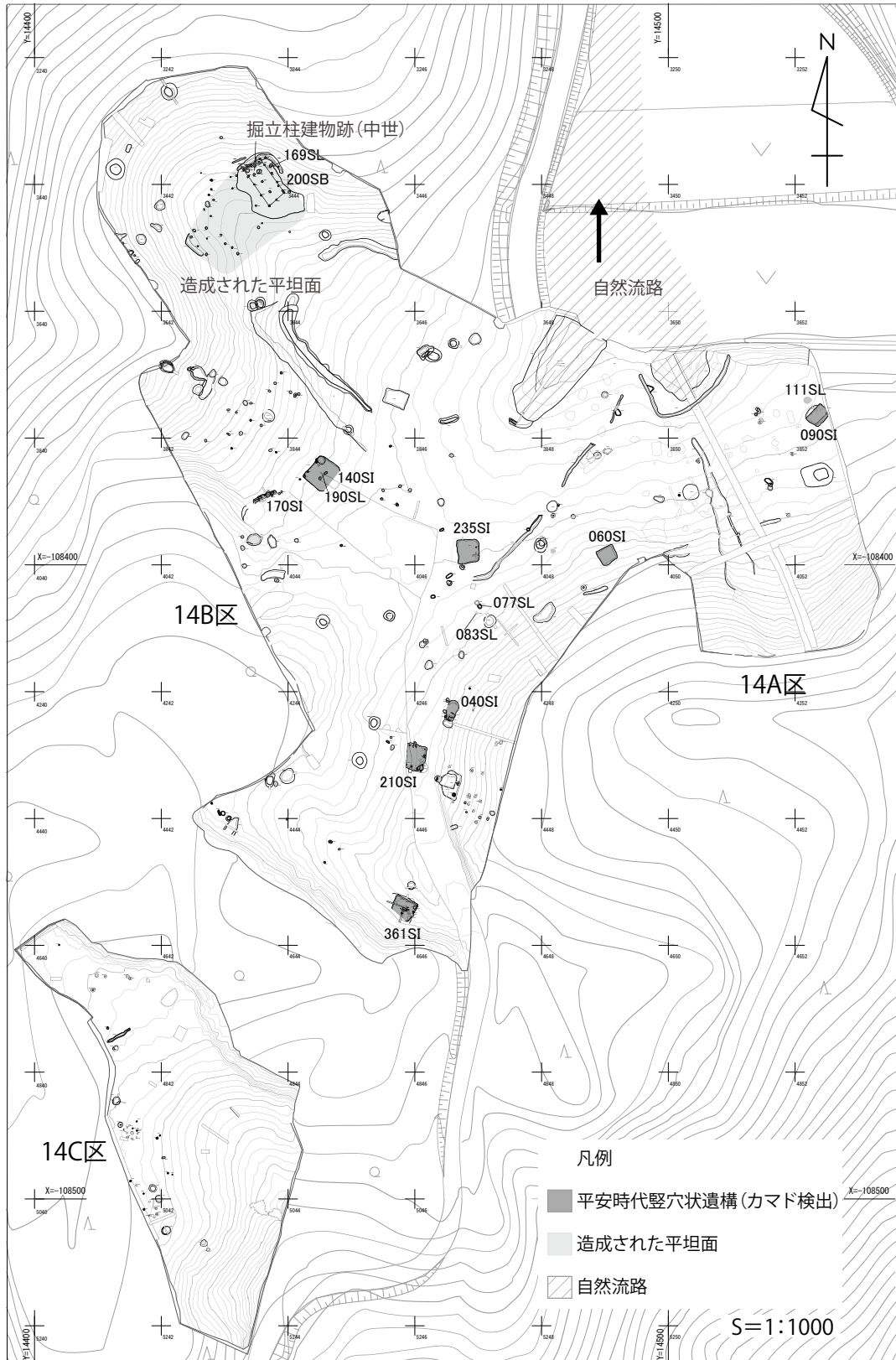


図1 第1面遺構全体図(1:1,000)